
ゴール～終わらない中学生生活～

鈴木季佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゴール～終わらない中学生活～

【NNコード】

N1815M

【作者名】

鈴木季佑

【あらすじ】

普通の人よりちょっと優れていた主人公は、ある日突然友達だと思っていたやつに両腕を刃物で切り落とされてしまう。
死んで、幽霊になつて、喧嘩して（！？）

青春 + 幽霊のほんのり恋愛（！？） = ゴールー！

もちろんフィクション。

残酷な描[画]とは書いてるものの、そこまで残酷な描[画]ではないです。

旅立ち

死んだ。

誰が？

俺が。

どうして？

両腕を切り落とされたから。

誰に？

親友だと思つてたやつに。

なんで？

俺が恨まれてたから。

そいつさ。俺は死んだのさ。

気がつかなかつた。自分が恨まれてたなんて、ちつとも気がつかなかつた。

地区の水泳大会で優勝したり、サッカー部に入つてスタメンになれたり……

よく考えれば、恨まれる要素はいくらでもあつたんだ。

でも、俺は自分が死んだ事を未だに認めるとは出来なかつた。

俺が死んでから一週間日の今日。

夕日が沈んでいくのを見つめながら、たゞつと校庭のサッカーゴールに佇んでいた。

> 18733 — 1329 <

冬の夕やは綺麗で、でも、どこか悲しげで……

そんな夕やは、俺は好きだ。

旅立ち（後書き）

はじめ

正直言つと、幽靈になるつてそんな悪い事じやないかもつて、生きてる時は思つてた。

きっと、好き勝手できるつて思つてた。

勝手に入家の家に入つたり、ポルター・ガイスト現象起こしてみたり、友達をおどかしてみたり……

だけど、いざ幽靈になつてみると、誰にも気がついてもらえないし、逆に気がつかせることもできない。

ただ、孤独で寂しいだけだ。

でも、完全に一人で、みんなに見捨てられてるつてワケではない。

1週間に一度くらい、クラスメイトだつた奴らが、俺が殺されたところに花を添えに来る。

泣いてるやつ、無表情のやつ、友達と話してるやつ。みんな行動は違う。

見ていて面白かった。

そういうえば、一人だけ毎日のように花を添えに来てくれるやつがいた。

クラスメイトの女子だつたはずだが、名前が思い出せない。

そして、その女子と話した記憶はあまり無い。

幽靈になると、生前の記憶が曖昧になってしまつのだらうか。

そつ思ひ、ちよつと悲しくなつてくる。

今までの楽しかった思い出が全部どこかに消えてしまつ……

友達とバカやつて叱られたり、家族と旅行に行つたり、サッカーの試合を見に行つたり……

「そんなの……いやだ」

自分が死んだ時より怖かった。

記憶がジワジワとなくなつていく恐怖。

そんなことなら、早く成仏したい。

でも、死ぬ前に、誰かと沢山話してから死にたいなあ。

そんな事を思つてたら、一いちらを凝視する女子に気がつく。

その女子は、いつも俺にお供え物をくれる女子だつた。

今日の下校時間はもうじつに過ぎたはずだ。

「どうしたの？」

声をかけても、じゅうぶん飯がつくはずがない。

だって、俺は幽霊だ。

まるで、この世に存在しないものが見えていたかのようだ。

「もしかして、俺のこと見えてたりして…？」

「えー！？」「ごめんなさいーっ！！見えてますうーー何も見なかつたことにするから成仏して下さいーーー！」

「ウソおツ!?

本当に見えていたみたいだ。

「おのれの荒てつぶりは常じやない。」

泡を吹いて倒れそうな勢いだ。

バタンッ！！

…本当に泡を吹いて倒れやがった。

女子が泡を吹いて倒れてから1時間ほど。

とりあえず、俺はどうする事もできないので、倒れた女子を見守るだけだ。

別に、いやじつことほやつてないし、幽霊なので出来ない。

今の時刻は18時。

今日は終了式だから、13時くらいが一般生徒の下校時刻。

この人は一体何でこんな遅くに下校しようとしてるんだろう？

「…う…う…う…せ？」

田が覚めたよ！

先ほどよつだいぶ落ち着いていたが、俺を見たらまた叫ぶのだらうか。

「『』は、学校だよ。きみ、俺の事を見て倒れりやつたんだよ」

「……あのやつ、あなた、本当に『』の前死んだ稻田君なのー?」

おつ、予想外の反応だ。

叫ばず、落ち着いて状況を把握しようつと……

「ねえねえ、なんでここにいるの?幽霊? そうなの? なんで成仏しないの? やつして? あなたの事殺した奴がゆるせないの? 自縛靈なの? やうなの?」

全く落ち着いていなかつた。

先ほどと違うのは、恐怖におびえた瞳から、興味心身でキラキラとまぶしく輝いている瞳だらう。

「ちよつとまて! ! そんないつぺんに言われたつて答えられねえよ! ! といあえず、お前の名前を教えてくれ」

「あれ? 覚えてないの?」

「ああ、残念だが」

「アタシ、あなたと…稻田くんと一緒にクラスだった長谷川古都だ

ハセガワコト

よ…」

長谷川古都…たしかに、どこかで聞いたことのあるような名前だ。

ふんわりした長い黒髪、ちょっととろんとした感じの瞳、凹凸ハツキリしている身体…って、何を見ているんだ俺は！？

自分がこんなにいやらしくやつだなんて思ってもいなかつた。

まあ、それはおいて置いづ。

長谷川さんは、さつきの慌てっぴりが全く似合わないような、見えた目だけならかなり大人しい、人形みたいな子だった。

「あのせ、なんで長谷川さんはいつも俺にお供え物をくれたの？」

自分の気を紛らわすために、適当な話題を振つて見た。

「ウハー！？なんで知つてんの！？」

「いや、見てたし」

「稻田君が…………たから」

「えつ？よく聞こえなかつた」

「……ッ、もう遅いから帰る…じゃあね…！」

長谷川さんは走って校門を出てしまった。

長谷川さん、なんて言つてたんだろ？

話を聞こつても、明日から冬休みなので長谷川さんはたぶん、部活が無い限りこないだろ？

と思つたが……

俺は、自分の横に置いてあるモノを見て、明日長谷川さんが登校して来るだろ？という事を確信した。

俺は、少しにやけながら一人ぼっちのクリスマスを校庭ですごした。

長谷川さんの通学鞄と一緒に。

クリスマスも終わった12月26日。

予想通り、長谷川さんは学校まで鞄を取りにやつてきた。

「来ると思つてたよ」

「…もしかして、アタシに会いに来て欲しかつたから鞄を忘れて帰つた事黙つてたの？」

「そんなこと……」

思つてないわけではない。でも、素直に一人ぼっちは嫌だというのも恥ずかしい。

「ああーーもしかして、図星？」

「いや、そんなこと…ついて、長谷川さん

「なによ？気をそらはうつたつて無駄だよ」

「……周り、人が見てる」

「あ……」

たぶん、周りの人たちから見たら、長谷川さんは独り言を大声で言つてゐるよう見ええるのだろう。

幽靈の俺は周りの人には見えないはずだから。

そういえば、何故長谷川さんは俺が見えるのだろう？

俺たちは校舎裏に移動して会話をすることになった。

「で、長谷川さんはなんで俺にいつもお供え物を？」

「昨日言つたじやん！..！」

長谷川さん、かなり顔が真っ赤になつてゐる。

そんなに恥ずかしい話なのだろうか。

「あのね、ナイショだよ…？」

幽靈だから誰にもいえないし。そういう心の中で呟きながら話しかけを聞いた。

「あと、稻田くん、ショックうけるかもしないからね」

「…？わかった」

長谷川さんが、急に暗い顔になった。

憂いを帯びた顔もなかなか魅力的だなあ。

「……アタシね、稲田くんのことを殺した拓海・小林くんと、みんなに内緒で付き合つてたんだ」

俺のことを殺した小林……

うつすらとしか思い出せない。

でも、殺したこと除けばいい奴だったと思つ。

「それでね、ある日、アタシ、稲田くんに助けてもらつたんだ」

「助けた？俺が？」

「うん。稲田君、忘れてるかも知んないけど」

はい、絶対忘れてると思います。

「……アタシが学校から帰るとき、いつもなら拓海と帰つてたんだけど、その日拓海が風邪で休んでたので、帰る途中に隣りの中学校のサッカー部の人たちが、『お前、小林拓海の彼女だろ』って言って、急に蹴ってきて……」

話が長かつたけど、まとめたら意外と短かった。

まず、長谷川さんが一人で下校中、急に他校生に蹴られた。

たぶん、小林への恨みを晴らすためだろ？

小林、サッカー上手だつたもんな。

でも、俺を殺す何週間か前から急に部活に来なくなつた……気がする。

それで、長谷川さんが他校生に蹴られてるところを、俺はたまたま通りすがり、人を呼んで助けた、と。

なんだか、自分の手で助けたわけではないのが、ちょっとだけ悔しかつた。

「それで、どうお礼すればいいのかわかんないし……拓海、きっと自分以外の男子にアタシが近づいたら怒るから……」

長谷川さんの目に光るもののが見えたが、きっと氣のせいだ。うん、そうだ。

「でも、アタシ、うつかり拓海に、『稻田くんに助けてもらつたんだ』って言つちゃつて…そしたら、拓海が急に怒つてどつか行つちやつたの。それ以来、拓海が話してくれなくなつて…たぶん、部活に出なくなつたのもその頃、」

氣のせいではなかつた。

泣いていた。

長谷川さんは、大粒の涙をボロボロと流していた。

…どうすればいいんだろう？

女子とはあまり話せないから、ソーシャルメディアについてのよくわからない。

「あの、話すの辛かつたらもう話せなくともいいよ」

「ううん、全然辛くないの。たぶん、誰にでも言わいでずっと黙つてた方が辛い」

そう言って、長谷川さんはハンカチで涙を拭きながら、また話し始めた。

「拓海ね、急に、稻田くんの悪口を私に言い始めたの。ビックリした。いつもそんな事言う人じゃなかつたから。しかも、稻田くんといつも仲が良かつたから、本当に信じられなかつた」

「………… そうだったんだ」

やつぱり俺は小林に恨まれていたのか。

わかつてはいたけど、ショックだった。

殺される直前、あの時の小林の瞳。

恨みと怒りに染まつたような感じの、恐ろしい瞳。

不気味に光る鋸と包丁。

たぶん、両方とも技術準備室と家庭科準備室から何らかの手を使つて持ち出したのだろう。

あの時、「ああ、俺はコイツに殺されるんだろ?」と呟つた。

殺される直前、自分の腕の感覚が無くなつて、両腕が落ちて、田の前にはただ腕から流れた血が流れていた。

地面は、夕日のよつに赤く染まつっていた。

そして、急に体がふわっと宙に浮かぶよつな感覚がした。

走馬灯なんてのは流れなかつた。

お別れ？

「 わあああああああッ ……！」

夜20時、学校の校庭で誰かの悲鳴が聞こえた。

俺は、長谷川さんと別れてからずっと校舎裏で昼寝をしていた。

幽霊だつて昼寝はする。

長谷川さんが帰ったあと、それしかすることが無かった。

そして、今の悲鳴で目が覚めたのだ。

誰の悲鳴だらうと思ひ、校庭へ行くと、信じられない光景が広がっていた。

刃物を持った謎の男が、長谷川さんらしき女子を追い掛け回していたのだ！！

長谷川さんを助けなければ…！

幽霊でも、なにかしら役に立つことができるはずだ…！

最初は俺のことが見えなかつた長谷川さんが、俺のこと見えたんだから……

今はやれるだけのことをやりたい！！

しかし、俺の体は動かなかつた。

しかも、体が消えかかっている。

なんで助けられないんだよ！？

なんで俺は消えてるんだよ！？

俺は成仏するのかよ！？

まだ未練タラタラなんだよ！！

目の前で長谷川さんが殺されそうになつてゐるんだよ！！

助けたいんだよ！！

何で助けたいかは自分でも良くわかんないけど……

もし……神様が本当にいるなら……

神様、俺が成仏する前に一度だけ俺の願いを聞いてくれ……いや、
聞いてください……

無理かもしれないけど、でも、本当に……

「俺を一回生きてた頃に戻してくれーッ…………」

繰り返し

田を開けると、俺の田の前には刃物を持った小林がいた。

……ひょっと待て。これ、状況変わったなくね？

いや、落ち着け、俺。

よく周りを見るんだ。

今は夕方じゃないか。

さつままで夜8時くらいだったから……

「よしあーーー俺、生を返してやるーーー。」

「つるせえなあ……意味わかんない」と言わざじやねえよ。今殺
してやるから……わ」

小林が冷酷に叫ぶ。

…なんか、展開がいきなりすぎて状況がよくわからない。

夕方、小林、刃物…？

もしかして、俺が殺された当口…？

「どうやつてメロを殺そうかな…まず、どこから切って欲しい
よ…」

そうだ、確かに殺される直前にこんな事を聞かれた気がする。

んで、次のセリフが、

『水泳大会で優勝してるし、ゴールキーパーもやつてるから両腕切
るか』

小林と俺の声がハモった。

小林はそれについてビックリする様子もなく、ただ俺をじりみつけ
ている。

確か、このあと俺は硬直して腕切られて即死状態だつけ？

ソレはまずい。

ちゅうとなんとかして場しのぎをしなくては……

「なあ、小林？…どうして俺を殺そうとするんだ？」

「そんな事聞いてどうするんだよ？…まあ、死ぬ前に教えてやってもいいか」

小林はそういうと、ため息を一つつき、田を思いつきり見開いて言った。

「お前が俺の欲しかったものを全部奪つていいたからだよ……！」

「全部…俺が奪つた？」

「ああ、そうだ。親が俺に『水泳大会に絶対優勝しなさい』って言われて、頑張つて練習したのにお前が優勝して…親はそれから俺のこと見捨ててさ。そのあと、中学入つてからお前と一緒にサッカー

部に入部したら、お前だけスタメン入りして…しかも、折角俺のこと好きになつてくれた古都もお前に盗まれそうになつた…！！！」

「ああ、俺ははやつぱり『コイツ』に惚まっていたのか。

「あのわ、お前だけ武器持つてるのは卑怯じやん。だから、喧嘩は素手でやひひひ！」

「…まあ、いいぜ」

拳で語り合おうとか、そういう類の台詞はちょっとだけ言ってみたかった。

殺されるなら、武器で殺されるより、素手で殺された方がなんかいひ。

まさか、ベタな漫画みたいに拳で語り合つて仲直りできるなんて思つてはいない。

「じゃあ、いくぜーー！」

俺はそういうと、久しぶりに大地を蹴り小林の方へ向かった。

喧嘩開始から数分後。

俺は、久しぶりにモノに触れることが出来てちょっと感動していた。

殴られた時の感じも、とても懐かしくて、どこか気持ちいい。

「俺はMじゃないぞーー！」

「ゼH…ゼH…稻田…なかなか強いじゃん」

「ハア……小林こそ……」

お互いを見つめ合い、また殴りかかる。

二人とも、体中癪だらけ。

最初の方は顔面を殴られた時に、なんていうか…視界がテレビのカラーバーがちょっとぼやけた感じになってしまい、周りを見るのが辛かった。

だけど、今はだいぶ慣れてしまった。

気のせいかもしれないが、小林の顔に笑顔が浮かんだ気がした。

本当に死ね?

「 もちろんあああッ ! ! !

俺的本日2回目の悲鳴。

喧嘩開始から數十分経過のことだった。

この誰かの悲鳴で喧嘩は中断された。

「 人…呼ばれたかな?」

俺がそう言しながら不安げに小林の顔を見ると、小林はありえない
といつた表情で硬直していた。

「 …古都……？古都の悲鳴……？いや、今日は古都を早く帰らせたか
ら違つはず……いや、でもこれ……」

小林は、ブツブツと何かを言いながら、悲鳴の聞こえた方向に走つ
ていった。

俺もその後を急いで付いていく。

悲鳴のした方向……校舎裏に行くと、長谷川さんと、見知らぬ中学生らしき人達が3・4人いた。

見知らぬ人たちが自分の卒業した学校の制服を着ていない限り、確かに隣りの市の中学校生徒かと思われる。

「お前ら……俺の古都になにしたんだよ！？」

「俺の古都とかマジウケるわ！…お一人さん、お熱いねえ～」

見知らぬ中学生、一言で表すと…下衆野朗という言葉がピッタリな金髪巨漢が馬鹿笑いする。

「さあ、二人揃つて天国へ行つてらっしゃーい」

そう言つうと、下衆集団は長谷川さんと小林をドンッと軽く押し、今はもう使われていらない物置に閉じ込め鍵をかけた。

そして、その物置から、卵が腐ったような強烈な臭いが漂つてくる。

なんだろ？、この臭いは？

それよりも、コイツら、誰？

「…お前ら何なんだよ？」

「俺達？俺たちさとある中学のサッカー部でえーす」

「何で小林と長谷川さんを閉じ込めた？」

「えーへじやあ、キミだけには特別に教えてあ・げ・る」

「うひうひ、下衆野朗はニヤッとこせりしへ笑つた。

「ナ・ン・ト・!あの物置のなか、硫化水素が充満しちゃつてゐるんで
一す」

「硫化水素？」

硫化水素という単語は聞いたことがある。でも、それがなんなのか
はよくわからない。

「あ、もしかして、知らない感じ？硫化水素つていうのはさ…よく
自殺とかに使われるあつぶなーい气体だよん」

「のとや、俺はよくわからない感情で埋もれていた。」

小林は俺を殺そうとした。

つていうか、俺は1回小林に殺された。

でも、神様だか誰だかしんないけど、俺を生き返らせた……といふか、時間を俺が死ぬ前に戻した。

んで、小林と殴り合ひて、仲直りできるかもって思つてたら……

小林と長谷川さんが殺されそいつになつてゐる。

静かな怒りが沸々と湧き上がつてくれる。

「コースで“学校の物置で学生カップルが硫化水素で自殺”って
そのうち流れるぜえ～」

「…めのよ」

「ハア？聞こえねーしい」

「やめんなよ言つてんだよ……」

俺が力の限り叫ぶと、下衆野朗共は一瞬ビクッと震えて黙った。

「お前ら、この前長谷川さんを囮んでたやつらだろ？確かに、お前らもサッカーやってるんだよな？なんで正々堂々と勝負しようって思わないんだよ？人殺ししてまでサッカー勝ちたいかよ！？」

今の言葉、特に最後の部分は、俺が幽霊になつてからずつと、小林に言つてやりたいと思つてた言葉だった。

死んでから後悔したつて遅い……そう、何かの本に書いてあつた。

生きてる時はあんまり深く考えてなかつたけど、死んでから考えてみたら、本当にせうだくなつて思つた。

きっと、生きてるという事自体が恵まれすぎでいて気がつけないだけで、気がついていない後悔だつていっぱいあるはずだ。

俺だつて、死んでから沢山後悔した。

だけど、今、また生き返れたから、少しでも後悔しないように……

小林と長谷川さんを助けたい。

守りたい

1人で4人に喧嘩で勝てるなんて思つてない。

しかも、俺は小林と喧嘩した直後だから、体中傷だらけ。

さらに、相手はかなり体格がいい。

かなりハンデを背負ってるけど、勝ちたい。そして、大切な友達を助けたい。

俺はまず、小林達を助けるために、近くにいた人を適当に呼ぶ。

「すいません！！俺の友達が物置に閉じ込められているんです！！有毒ガスの中で苦しんでいるんです！！助けてください！！」

かなり馬鹿らしかった。

これを信じてくれる人がいるだろうか？

信じてくれたとしても、有毒ガスの中に飛び込む人はいるだろうか？

ちなみに、物置に鍵がかかってるとは言つても、所詮本来南京錠をかけるところに太い木を差し込んでいるだけ。

だから、中学生女子でも頑張れば鍵を外す事は出来る。

「あのあ……有毒ガスって具体的に何でいう氣体ですか？」

助けを呼んでいる俺に声をかけてくれたのは、か弱そうな女子だった。

この女子の着ている制服は、確か下衆野朗共とは別の市の中学校のものだった。

でも、そんなこと、今はどうだっていい。

「硫化水素って氣体なんです！－」

「ああ。なら、私が助けに行つてきますよ。安心してそこの人達倒してください！－！」

そう言つて、その女子は走つて物置の方に走つていった。

……って、何で俺が下衆野朗共を倒さなくちゃ行けないことを知ってるんだろ？

まあいいか。

さあ、あとはこの田の前の下衆野朗共を倒すだけだ！

「テメヒラ、かかるて来やがれ！！」

「アハハハッ！正義のヒーローぶっちゃつてウケるわあ～」

「そうだよーお前はいつぺん死んどナッ！！」

グサツ

自分の腹のあたりから、嫌な音がした。

さつそくゲームオーバーだと、格好のつけようが無い。

最悪。

そして、自分の腹を見ると、サバイバルナイフが突き刺さって、赤い血がタラタラと流れ……

いなかつた。

というか、サバイバルナイフは俺の腹に刺さっていなかつた。

俺は、また体が透けていた。

どうやら、敵は挟み込みをしていたらしく、サバイバルナイフは俺の腹でなく、下衆野朗の味方の腹に刺さっていた。

「ぐわわわわ……」

バタンッ！！

下衆野朗△は地面へ倒れこんだ。

そして、地面はどんどん赤く染まつていぐ。

「おー、おこ……△お前が刺されてるんだよ……」

何故再び幽靈になつたのか全く分からぬ。

もしかして、完璧生き返つていたわけでは無く、タイムリミットがあつたのだろうか。

相手に俺の姿が見えてないことを確認して、俺は物置の方へ向かつた。

下衆野朗共は、慌てふためいた様子で、救急車を呼ぼうとしている。しかし、うちの学校の先生がそこに立つていたので、色々なことが手遅れである△。

「大丈夫ですか！？」

「い、……なんとか……」

「助けてくれて……ありがとうございます……」

よかつた。小林も長谷川さんも無事だった。

助けてくれた女子にお礼を言いたいが、幽霊になつてるので喋れない。

倉庫が水浸しになつていることから、硫化水素とやらは水をかけられぱぞうにかかるようだ。

『長谷川さん、助かつてよかつたね』

と、長谷川さんにむかって喋つてみると、何の反応も返つてこない。もう何回か名前を読んでみるが、しかの方は見えないし、聞こえていないようだった。

小林にも同様に話しかけてみるが、反応は無し。

もひ、喋れる人がいなく。なつちやつたんだ。

完璧一人、か。

俺の半透明の体が、どんどん光の粒となつて消えていく。

本当に成仏してしまつのだらうか？

まだ未練はあつたはずだ。

小林や長谷川さん達を自分の手ですぐえなかつたのは仕方が無いとして……

そもそも、俺は何故再び幽靈になつていいのだらうへ。

そして、時間が戻る前に見た、悲鳴を上げる長谷川さんと、刃物を持った小林はなんだつたのだらう？

そう考へてゐる間に、体はどんどん消えていき、考へるとこう行動も面倒になつてきた。

さよなら、
みんな。

ありがとう。

ゴールなんて無い

死んだ。

誰が？

俺が。

どうして？

両腕を切り落とされたから。

だけど、2回目の死は死因不明だ。

誰に？

親友だと思ってたやつに。

なんで？

俺が恨まれてたから。

でも、2回目の死は一応仲直りしたという事です。

…本当に死んだんだなあ、俺。

でも、成仏したはずなのに、成仏してない。

夕日が沈んでいくのを見つめながら、ただずつと校庭のサッカーゴールに佇んでいた。

冬の夕やけは綺麗で、でも、どこか悲しげで……

そんな夕やけが、俺は好きだ。

そう思いながら、まぶたを閉じる。

俺の中学生生活はこうして幕を閉じ……

「稻田くん？起きてよー？」

「いーなーだー！校庭で寝てたら風邪ひくぞーー！」

ビックリして田を開けると、長谷川さんと小林が、二三三しながら見ていた。

「稻田あ、俺達ずっとお前の事探してたんだぜ。」

「え…お前ら、俺のこと見えるの？」

「ハア？何言つてんだ、お前？見えること決まつてんだろ？幽靈じやあぬまいし。」

「え、いや、俺は幽靈…」

「馬鹿なこと言つしないで、早く帰ろーー！」

やつぱり、長谷川さんと小林は俺の腕を引っ張った。

俺の中学生生活はまだ終わっていなかつたらじしい。

じゃあ、先ほどの出来事は、すべて夢だったのだなつか。

まあ、やつこいつにしておけばいいか。

俺の中学生生活が、再び幕を開けた。

ゴールはこいつでも田の前にあるけど、すぐに逃げてしまつ。

俺たちは、わひと、その逃げてしまつゴールを追つて生きていくの
だろ。

ゴールなんて無い（後書き）

はじめまして & amp;... いにちは。

すずきとよすけ
鈴木季佑と申します。

つて、最初にも言いましたね（汗）

この小説は、とあるブログに書いていたものを加筆訂正し、ストーリーを大幅変更してFC2小説に投稿したものを作成し、さらに加筆訂正し、小説家になろう様公開させていただきました。

書き終わつたあと、真つ先に思つたことは、終わつてゐるのに終わらない中学生生活という題名はどうかといつ事でした。

ちなみに、ゴールといつのはサッカーゴールの「ゴール」です。

稻田君が「ゴールキーパー」という設定があるんですが、活用できなかつたことをとても悔やんでいます。

番外編、書きたいなあ。

こひまで読んでもらえて、本当に嬉しいです。

以下スペシャルサンクス。

スペシャルサンクス

小説家になろう様

yahoobログ様

主人公のモデルのSくん

登場キャラの名前を一緒に考えてくれたAさん

サッカー部の人

この小説を読んでくれたすべての皆様

レビュー や励ましの言葉をくれた人。

本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1815m/>

ゴール～終わらない中学生活～

2010年10月10日06時30分発行